



直撃インタビュー

お話でてこい! ^{けき}劇やミュージカルの
もと『脚本』をつくる岐阜市生まれ

^{りん}
いずみ凛さん

岐阜の劇団はぐるまをはじめ、東京の劇団やNHKの番組のために、年間何本もの脚本を書くという、脚本家いずみ凛さん。この7月に岐阜市民会館で上演された、ご自身の脚本によるミュージカル『不思議の国のアリス』の本番当日、劇場のロビーでお話をうかがいました。

脚本家になったきっかけ

3歳のとき、親に連れられ劇団はぐるまの『郡上一揆』に子役として出演して以来、俳優として、スタッフとして舞台づくりにかかわってきました。その後留学した中国の演劇学校で、映画の脚本を書いていた友達に影響を受けて、はじめて脚本というものを書いてみました。仕事として最初に書いたのは、NHKのラジオドラマの脚本です。



ひとつの舞台が生まれるまでに

書くという作業はとてつらく、よく逃げ出したいくなります。でも、苦しみの向こう側に楽しさがあるとわかっているから、がまんできます。あきらめずに苦しみ続けているうち、登場人物たちが生き生きと動きはじめ、その先を書くことが楽しくなってくるのです。簡単に楽しいことだけが手に入るということは、決してありません。

舞台は、表でスポットをあびる俳優だけでなく、裏で支えるスタッフがいてはじめて成り立ちます。小道具一つ、衣装一着にしても、魔法のように生まれてきません。いろんな人がそれぞれの担当で自分の持ち味を生かし、力を合わせる。脚本家という仕事もその一つです。人との関わり合いぬきに、よい舞台は生まれません。

岐阜から作品を送り出す

今回の『アリス』をはじめ、いくつかのミュージカルが東京の劇団によって上演されました。また、岐阜空襲を描いた『夜空の下に降る花は』は、劇団はぐるまによって、岩手や松山でも上演され、多くの方にみていただきました。何でも東京中心の文化がよい、ということではいけません。東京に住んでいても、わたしは岐阜っ子。岐阜で生まれた作品を各地へ送り出したり、東京で生まれた作品を岐阜でみていただいたりすることには、大きな価値があると思っています。岐阜のお客さんに、岐阜生まれのすばらしい舞台を届け続けることは、わたしの夢のひとつです。

いずみさんからみんなへのメッセージ

テレビや映画とちがって、演劇は演じ手とお客さんが、いっしょになってつくるもの。劇場って、とても不思議で、とてもすてきなところ。生の舞台を、ぜひみにきてね!



チェシャ猫役の浅井栄富さんと

友達といっしょに、おもいきり遊ぼう。おもしろいと思うことは、今のうちにやっておいた方がいい。たくさん遊んだ分、大人になってから、そのことを思い出して、幸せになれるんだよ。

いずみ凛 プロフィール

1960年11月7日 岐阜市に生まれる

木之本小・本荘中卒業後、岐阜北高、中央大を経て、中国中央戯劇学院に留学、劇作家を志す。演劇やミュージカルの脚本をはじめ、NHK「お話でてこい」などの脚本で活躍中。代表作に『ナガサキ'ん グラフィティ』(2003年度斎田喬戯曲賞優秀賞)、東京芸術座『GO』(原作/金城一紀) 劇団はぐるま『夜空の下に降る花は』などがある。父親は劇団はぐるま代表こばやしひろし氏。現在は東京都在住。



いずみ凛さんのサイン入り脚本または上演パンフレットをプレゼントします。くわしくは裏面をごらんください。